

## 会長挨拶

今井直哉

昭和61年9月、資源工学科主任を引継いでから、早いもので第2年目を迎え、今年の夏休み明けに新主任にバトンタッチすることになった。したがって、この資源工学会会報23号の会長挨拶が私として最後のものになる。ここに、この1年を顧みて、わが学科の現況と将来の展望を申し述べ、もって挨拶に代える次第である。

定年間際で学科主任の煩雑な事務を遂行することはなかなか難しく、私の“物忘れ”などで随分と関係各位にご迷惑をおかけし、資源工学会の運営にも致らぬ点が多々あり、ここに深くお詫びする次第である。昨年は国立大学の入試制度の改革の“とぼっちり”を被って手続き率の異常な高率へシフトを読みとることができなかった。その結果、定員の倍近い新1号を受け入れることになり、教室教職員各位に過重な負担をお願いする破目になった。

さて、今年はどうかという、志願者数は第1志望・第2志望とも約20%増加しているが、本年の手続きを予測することは困難で、第2次手続後幾人の入学者がでてくるのか、かいかも見当がつかないのが現況である。

当教室はちょうど世代交替の時期にあたり、40年もの長きにわたり、教室の発展ひいてはわが早稲田大学の今日の隆盛に大きく寄与された萩原義一・房村信雄両教授が今年3月31日付で定年退職を迎えられる。両教授の学内外におけるご功績は今さら申すまでもないことがらであり、大学の定めとはいえご壮健な

両教授が教室から去られることはさびしい限りである。教室もこれからいろいろさびしい事態に遭遇することが予想され、今後変らぬご指導を念願する次第である。

今まで、教員12名、助手2名、で学科の運営を何とか切りぬけてきたが、今後は10名の教員で過重な負担に耐えて行かねばならず、事態は誠にさびしいものである。ただ、幸なことには、大学院博士課程3年の中山智晴君が昭和63年4月1日付で助手に任用されることが決定し、内田悦生・山崎淳司両助手を加え合計3名となり、若手が強化され、当学科の研究業績の高揚が期待される。

これに関連して、内田悦生助手は、彼の釜石鉄・銅鉱床に関する英文論文“Relation between Zonol Arrangement of Skarns and Temperature of Formation at the Kamai-shi Mine, Northeastern Japan”に対し日本鉱山地質学会賞（奨励賞）を受賞し、2月1日の同学会総会で表彰されたことは喜ばしいことである。

早稲田大学理工学部は今年4月で創設80周年を迎え、いろいろな行事が予定されている。当教室では学内外の諸情勢の急激な変革に対応して、既に教育・研究体制の抜本的見直しが検討され、その具体案は漸次煮つまってきたが、昭和63年度前半は昭和64年よりその実施を目指して努力する所存である。卒業生各位の今後変わらぬご指導・ご鞭撻をお願いする次第である。

昭和17年の10月、私は陸軍に召集されて千葉県柏市豊四季にあった第4航空教育隊に初年兵として入隊した、間もなく現在の仙台飛行場のところにあった第12航空教育隊に転属した、当時軍は航空兵力の増強を企図していて、それに必要な下級将校の養成に必要な基礎教育を一括して進めるために、全国各地の航空教育隊から大学、高専卒業の初年兵をここに集めていたようである、昭和18年10月気象係将校として札幌にあった第11野戦気象隊に赴任した私は、北海道内、樺太各地の飛行場において飛行戦隊に気象情報を提供する任務に当たった。翌19年8月北千島幌筵島の北の台飛行場勤務を命ぜられ赴任し、飛行戦隊ばかりでなく地上師団、海軍等に協力しその地で終戦を迎えた。

終戦の年の12月ウラジヴォストックに上陸し抑留生活に入った私は、厳寒のシベリアを貨車で横断してヨーロッパ、ロシアに運ばれ、以来各地で自活のためと称して各種の労働に従事させられたが、最後にモスクワ東南約400kmのタンボフ州という所でヴォルカ河支流ツナ河に、周辺農村の電化と舟運の確保のためのダムの建設に従事した。学校の授業で測量を少々嗜っていたことが幸いして専ら測量をやらされ、そのためソ連の技術者との交流ができて片言のロシア語が喋れるようになった。その後、本格的にロシア語の勉強をせざるを得なくなったという事情もさることながら、現在“上級露語”の授業を引受けていられる背景にはその時の経験がかなり与って力があつたと思つている。

昭和23年5月、足掛け4年の抑留生活を終つて帰国し、翌24年6月に理工学部助手に採



萩原義一（はぎわらよしかず）。大正6年7月14日東京に生れる。第一東京市立中学校（現都立九段高校）、第一高等学院を経て昭和15年早稲田大学理工学部採鉱冶金学科入学、昭和17年学業半ばにして応召（昭和19年9月卒業）、陸軍航空気象係将校として北海道、樺太を転戦した後北千島幌筵島において終戦、ソ連抑留後昭和23年5月帰還、理工学部助手（24・6～27・3）、専任講師（27・4～30・3）、助教授（30・4～38・3）、教授（38・4～63・3定年）。34・12工学博士。理工学研究所幹事（37・10～41・9）、資源工学科主任（49・10～51・9）、商議員（53・10～61・9）等歴任。

用された。その間の経緯については最終講義の中で述べたし、かつは紙面の都合もあるので省略するが、一言故中野実先生のお蔭を蒙つたと申しておきたい。

さて、私が帰国し早稲田に就職した昭和23～24年ごろは、敗戦後の混乱もやや収まっ

て世の中に復興の気運が芽生えはじめた頃であったと思う。石炭の傾斜生産などという言葉も盛んに使われ始めていた。炭鉱は生産の回復や強化に向って懸命の努力を進めていた、従来の沿層坑道を中心とする坑内構造から岩石坑道を基本とする坑内構造への転換が計られようとしていた。いうまでもなく生産の拡大、保安の向上がその目的であった。金属鉱山ばかりでなく炭鉱においても岩石掘進にもなう粉じんの抑制が、じん肺防止の面から重要視されるようになっていた。

一方、中野先生や房村先生はじめ諸先生方のご努力によって、“鉱山保安”は早稲田”という評価が世の中に定着しつつあった。

そういう環境の中で、私はさく岩作業に伴う粉じん発生の状態ないしはそのメカニズムについて研究をしようと考えた。以来、当時の9号館地下の模擬坑道での実験室実験、炭鉱坑内での現場実験などを進めた。現在のように立派な装置や計器など全くなかった時代だったから手作りのもので間に合わせた。したがって今考えれば冷汗ものでしかないけれども、どうやらでっち上げることができたのが“さく岩作業に伴う粉じんの発生”という題の学位論文であった。

中野先生の影響もさることながら古い東京下町育ちのオッチョッコチョイ精神もあって、大学の教師は世の中の潤滑剤的役割を果すべきであるというのが私の持論である、したがって、碌な力もないのに、彼方此方学外活動に首を突っ込んできた、そんな中で、忘れることのできない幾つかについて述べてみよう。

炭層を坑内採掘すれば必ずその上の地表は沈下する。北九州にあったある炭鉱の採掘鉱区の中にある化学工業会社の工場の冷却水用の大規模な貯水池がある。採掘によってその貯水池のダムが沈下・崩壊すれば工場の操業は勿論周辺地域に重大な影響を生じる。採掘がダムの安定性にどのように関係するかを前

後10数年にわたって研究した。学校などでは高価で手の届かないような測定装置を使ってダムの沈下量を測定し、沈下に基づくダムの挙動を調べた。昭和44年炭鉱のスクラップによって研究は中断されたが、その間に得られた各種のデータは、事が事だけに公表できなかったが極めて貴重なものであった。

昭和30年代に入って所謂エネルギー革命の影響でわが国炭鉱会社の経営状態は悪化した。

非効率炭鉱をスクラップし、優良炭鉱には国の援助資金を投入してビルトアップしようというので、そのための基礎資料を得るために設けられたのが石炭鉱業調査団だった、私はこれに数年間参加した。日本の石炭鉱業のために少しでもお役に立ちたいと考えて一生懸命に努力した、しかしその結果は現在の状態である。何とも空しい思いである。

法律は世の中の進歩や変化によって不備を生じることがままある、じん肺法その他の別表に現定されている“粉じん作業場”や“粉じん作業”の見通しのためのデータを得るために、じん肺審議会の委員として昭和55年度には炭鉱鉱山の坑内の、昭和57、58年度には港湾の荷役作業に伴う粉じん発生状態の調査を行なったが、その結果別表に重大な改革もたされたことが忘れられない。

以上のように述べてくるとまだまだ数々あるが紙面も足りなくなったのでこの辺で止めたい。

早稲田に在職した39年間を振り返ってみると、力不足で誠に頼りない教師であつといわざるを得ない。しかし、幾分なりと何かのお役に立てたとすれば、それは早稲田の教師であつたお蔭とと思っている。

早稲田は偉大であり永遠である、その早稲田の歴史のある一時期に教師として参加できたことを心から誇りに思っている、その早稲田の中のわが資源工学科のこの上の発展を祈ってやまない。

## 塵（ちり）の話

房村信雄

労働衛生の分野でも鉱山保安の分野でも最近は「粉じん」が重大問題の一つになっている。炭鉱では昔から炭じん爆発の防止が鉱山保安の最重要課題とされていたが、じん肺の原因としての粉じんは金属非金属鉱山ほどには重要視されていなかった。ところで現在の日本語では古来の漢字が疎んぜられて、当用漢字あるいは仮名書きされている。例えば「粉じん」とか「じん肺」とか書かれている。漢字は書くのに手間がかかり覚えるのが大変であるという欠点もあるが、覚えてしまえば一見して意味がわかり、耳で聞いたのではまぎらわしい言葉でも漢字で書かれたものを見れば直ちに意味や言葉のニュアンスがわかる。

筆者の調べた範囲では、1890年の坪井次郎「塵埃吸引病」が近代日本の粉じん問題に関する最初の論文であり用語でもあった。それから1947年の松藤元「塵埃」まで約60年間は書籍や論文では塵埃という用語が使われていた。次に1916年の鉱業警察規則改正から1955年頃までの規則、通達、書籍、論文等では粉塵という用語が使われ、粉じんという表記は、戦後になって漢字制限が行われるようになって始めて使われるようになった。このほか、「塵」、「岩粉」、「鉱粉」などの表記も一部で使われていた。

「塵」という漢字の成り立ちを調べてみると、始めは鹿を3つ重ね（森のように）その下に土を書いた字であった。鹿3つとは鹿が沢山群れているという意味であり、鹿が群れていることから土ぼこりの舞い上ること、すなわち「ちり」となった。このようにして意味が定着すると、必ずしも鹿3つの必要はなく簡素化されて塵となった。この字が土ぼこ



房村信雄（ふさむらのぶお）、大正6年4月29日東京生れ。京橋商業、第一高等学院を経て昭和20年9月30日理工学部採鉱冶金学科卒、同年10月1日早稲田大学専門部工科講師、理工学教務補助、以後理工学部講師、助教授を経て29年8月工学博士（防爆岩粉による炭塵爆発の抑制）、37年4月1日教授、63年3月31日定年退職。この間の主な公職、学内：理工学研究所管理委員、鑄物研究所管理委員、産業技術車修学校管理委員、校友会幹事、学報編集委員、資源工学科主任、商議員、大学史編集所運営委員、システム科学研究所管理委員。通産省：鉱山保安試験審査会会長、中央鉱山保安協議会会長、機械安全化無公害化委員会委員長、日本工業標準調査会委員、石炭鉱業審議会委員。労働省：じん肺審議会委員、大規模建設工事計画審議委員、労働安全衛生コンサルタント常任試験委員。その他：日本保安用品協会会長、日本鉱業会理事・副会長、安全工学協会理事。

りを意味するとなると、土ぼこりは小さな土の一片であるところから、塵はさらに簡素化されて<sup>ち</sup>塵となった。塵は現代中国の簡略文字ではなく諸橋大漢和辞典に収録されているちゃんとした古字であるが、日本ではほとんど使われていない。

「粉」の原意は米の<sup>こな</sup>こなということで、古代中国では米の<sup>こな</sup>こなを顔料に使用したということである。この意味では白粉（おしろい）は正にそのものズバリの意味に使われている。粉は米を分ける、すなわち米を粉碎して<sup>こな</sup>こなにするという意味から、固体物質を粉碎して作った有用粉体を意味するようになった。米は食料でありまた有機物の代表でもあるが、これに対して<sup>ふん</sup>粉（ふん）という字もある。これは土を無機物の代表としたもので、無機物を粉碎して作った<sup>こな</sup>こなであるが、日本では使われていない。

「埃（あい）」とは説文によれば塵のことで、風に舞い揚った塵であるとされている。したがって我われが問題にしている浮遊粉じんは漢字本来の意味では「塵埃」と表記するのが正しいことになる。「<sup>こな</sup>粉塵」はヒトにとって役に立つ<sup>こな</sup>こなと有害な<sup>こな</sup>こなとの両方を含めた熟語であって、我われが使っている有害な<sup>こな</sup>こなという意味がスッキリとは表わされていないのである。まして粉じんと表記すれば大切な塵のほう<sup>こな</sup>が仮名書きされることにより粉のほう<sup>こな</sup>が浮び上って来てしまう。もっとも近年は有用な<sup>こな</sup>こな<sup>こな</sup>のほうは「粉体」と呼び「粉

じん」のほうは有害な<sup>こな</sup>こなを表わすようにしている。現代中国語では、我われの粉じんは<sup>ち</sup>塵埃（チエンアイ）であり、中国語の<sup>ふ</sup>粉塵（フエンチエン）はばいじんの意味で使われている。

日本語の塵の語義は大別すると、①ちり、ごみ、②俗世間、に2分される。中国語の<sup>ち</sup>塵も同様であり、日本の塵文化は中国思想の流れを受けているのが明らかであり、基本的には塵は余り良い意味では使われていない。ところが旧約聖書の創生記第2章では、神は土の<sup>ちり</sup>ちりからアダムを造り、その僕として万物を（ただの）土から造ってアダムの<sup>ちり</sup>処へ遣わした、とある。これによって見ればちりはただの土よりも撰ばれたものであり価値の高い物であるとしなければならない。インド・バラモン教の古典「マヌの法典」では空気中に浮ぶ塵埃をすべての量の中の最も小さいものとし、土や塵は火や水と同じく<sup>ちり</sup>浄きものとしている。

ドイツの炭鉱では、坑内から昇坑直後に手も顔も洗わず炭塵に汚れたそのまま、シナップスを一杯、ビールを数杯傾けながら談笑するのを常としている背景には、炭塵を不浄視していない文化があるためと考えられる。仏教思想では塵は<sup>ちり</sup>けがれとされているが、マヌの法典では仏教を邪宗と決めつけている。このような訳で同じく古代インドで発達した2大宗教が塵に関して全く相反する見解をとっているのは興味深いことである。



## 双頭の鷲の旗の下に

岩崎 孝

昭和25年6月に始まった朝鮮戦争によって国連軍の兵站基地になった日本は、いわゆる特需景気の波に乗り、中でも鉱工業生産はにわか活況を呈するに至った。もともと鉱業は国の基幹産業ということで、戦後の物資困窮の時代でも、随分と恵まれた「配給」があり、このことが当時の学生をして、鉱山会社や大学の鉱山学科（資源工学科の前身）を選択せしめる、1つの理由になっていたものである。

その頃はまた、大学の鉱山学科では、「鉱山実習」が必修科目でもあった。夏休みが近づくと、何処へ実習に行くかで、仲間達の情報交換が頻繁に行われるようになる。私の場合は漠然と、炭鉱へでも行ってみようかとは考えてはみたが（石炭産業は特に花形であった）さて具体的に此処というあてはない。そこでふらりと出向いたのが、御大、中野実先生（故人）の研究室。丁度昼休みの時間だったろうか。折から御大は田中正男（故人）、房村、萩原といった若手の先生方と、何か談笑中である。そこで恐る恐る「私は何処へ行ったらよいでしょうか」とお伺いをたてた。「丁度よい、端島へ行って、房村君と萩原君の手伝いをしろ」と中野先生。かくして行先はきまったのであるが、肝心の端島が長崎港から17kmの洋上にあり、別名軍艦島、その頃話題の映画「緑なき島」のモデル、等々と知ったのは、炭壁注水による炭塵抑制効果の実験計画について両先生から指示を受けた、それから2、3日あとの事であった。

端島での「お手伝い」は、注水前後における払いの浮遊粉じんを、労研式塵あい計で採取することと、採塵ガラス板の整備というきわめて単純な仕事のはずであったが、ここに1つの陥し穴があった。ほとんど毎晩のように行われた坑長接待という宴会がそれである。

「特配」のオールドウイスキー、メチルアルコールの心配がまったくない清酒、それに新鮮な魚類というメニューのその宴席に、「先生の助手」ということで連なることができたのは感激であったが、あとがいけない。酔顔朦朧、酔魔の到来である。そのために採塵用の薄いガラスを拭く手許は狂いつ放し。何10枚かがその代償としてごみ箱に消えた事であった。また翌日はお定りの宿酔い。45°の偽傾斜払いの深、中央、肩と移動しながらの採塵操作では、膝下まではまり込む粉炭に足を取られて顔面制動と、惨憺たる状況となった次第である。

一方両先生はといえば、宴会後、直ちに顕微鏡による採取粉塵の計数に取掛られてこれを終了、翌日はまた歩取りも軽く（？）急傾斜払いを往来される、といった酒豪振りを発揮されていた。これはもう、正覚坊と渾名された坑長氏（本名は新開氏といわれた）を、遥かに凌駕する勢いであった。

名著「鉱山保安学」の初版は昭和26年1月である。端島行きが7月9日であったから、当然のことながらそれはすでに市販されていたわけであるが、迂闊にも私はそのことを知らなかった。実習担当係員から「あの本、読んだか？」と聞かれ、しまらぬ返事しかできなかったことを覚えている。定価680円という、当時にしては仲々の値段ではあったが、房村先生担当「採鉱学第五」の参考書として、実習終了後、早速調達に及んだものである。勿論、その中心的執筆者は房村、萩原両先生であった。

その「保安学」が出版されてすでに37年、中野先生、田中先生亡きあとの「保安のワセダ」は、房村、萩原という2つの中心を持つ楕円のように、斯界に名声の輪をひろげていったことは、今更いうまでもない。これはまさしく「双頭の鷲」の旗印のもとに、ヨーロッパ大陸に君臨した神聖ローマ帝国そのものであった、と私は思っている。

・ 学生時代の炭壁注水実験とそれに係る粉測定を第1回とすれば、同時に、両先生のお手伝いをさせていただいたのは、都合3回になる。昭和55～56年の鉱山における粉じん作業の実態調査、および昭和57～58年の港湾荷役作業に係る実態調査（いずれも労働省の委託研究）、がそれである。後半2度にわたる作業の場合も、私のした事といえば、両先生が画かれた軌跡の上をただなぞるだけ、という気楽(?)なものであった。それだけに両先生への負担が増したのではなかったかと、いま殊勝にも反省すること頻りである。

とはいうものの、停年退職という現実を避けて通ることのできない事実である。双頭の鷲のふところに巣喰っていた鳶も、気楽に中空で輪ばかり画いてはいられなくなった。房村先生が中心となって築かれてきた粉塵対策の名城は、たとえ鉱山炭鉱の少なくなった今日でも、取りこわすことはできない。塵肺の予防と撲滅が、いま全産業分野に課せられた宿題になっているからである。また、故中野先生から萩原先生へと引継がれた「ワセダの新しい灯」である骨材資源工学を、資源工学や鉱業の中に、どのような形でともし続けていくかも、また大きな課題である。

両先生のどこの部分をも追越すことのできなかった浅学非才の身、わずかに共通点といえば巳年であるということだけの呑気鳶は、いままた改めて恐れおののきを感じている。

(昭28年鉱山、資源工学教室、教授)

## 房村先生との四十年

### 西村光一

私は昭和25年に採鉱科を卒業したので学生時代を含めると40年以上のお付き合いとなる。一貫して国内の石炭鉱業に関与してきているので少くとも先生の業績の一部と直接・間接関係があったと言える。

現場での20年間は間接的に介して本店・石

炭協会と現在の研究所では直接御厄介になり、年と共に濃密になっているのが現状であり、週に何回も御会いすることも屢々である。

不思議なものでおつき会いの中で寝食を共にした時が頭の中に刻み込まれているので、この辺の思い出を綴ってみたいと思う。

### 学生の頃

私の卒業論文は房村先生の下で「古河好間炭鉱の通気計画」の標題で同期の佐伯成信君と現場計測とまとめを行った。

夏の暑い日、通気の係員と一緒に入坑して手造りの傾斜水柱計で坑道の抵抗を計測し、断面と風速を測定した。石炭鉱山保安規則の施行前の昭和24年の事である。排気坑道は風化して天盤が剝離し、この中を這うようにして丹念に廻った。先生も我々の卒論のために大変御苦勞された。一休みはチェスターフィールドの一服で通気の係員はガス測定器があるので安心してやろうと言うのに呆された。これも戦中の名残りであろう。

宿舎は坑員寮の安眠室で当時傾斜生産のさ中で夜番の坑員の睡眠をとるため窓の全くない部屋であつた。差入れのビールを先生を含めた3人でラッパ飲みするのが楽しみであつた。先生は

- (1) どんな事でも真剣に取り組まれる。
- (2) 酒は大変お好きであるが絶対にくづれない。と言う印象が強い。

### 炭鉱勤務の時

三井鉱山に入ってから現場と本店を往復しているが特に本店保安部と石炭協会の時には、通産省、あるいは関係機関の委員として、私ども現場技術者をサポートされ学問に仕える先生として苦しまれたのではないかと思う。

- (3) 委員長として委員の納得のゆく結論を導かれる。安心してお任せした。

### この7、8年

昭和55年から現在まで研究所で石炭の生産保安の技術開発の仕事をしているが、先生は炭鉱の存立に係わる数々の業績を残されてい

る。この間には北海道・九州でガス突出・ガス爆発・抗内火災など大きな事故が続いたが都度事故調査団の一員として先生と共に原因究明に当たったが先生はこの対策に腐心された。

59年9月には海外調査にも同行した。西独の炭鉱研究所救護隊本部長コック氏と先生は若い時からの付き合いがあり、卒直な意見交換と、データも積極的に提供を受け目的を達成することが出来た。独、英、佛の炭鉱保安のトップの中で先生の哲学は彼等に深い感銘を与えたのが印象に残っている。

また、62年4月韓国ソウルにおける国際石炭鉱山会議の夜の部で韓国鉱山学会長を囲んだ懇親会で日韓両国の各大学が校歌の披露をし先生を含めた早大OBの「都の西北」の大合唱が臉に残る。

(4) 外国人に対して筋を通った議論をされるので信頼され、かつ敬愛される。

(5) よくメモをとられ、それが英語である。

我々後輩にとって鑑と言える。私は赴任の際中野先生から「早大は反骨精神が腰の軽さに繋がる」と訓辞を頂いたが学問の世界の中で先生もこの訓えを引継いでおられると思はれる。先生はまだまだ御元気で御見受けするので今後とも御指導くださいませことを乞い願う次第である。

(昭25年採治、石炭技術研究所・理事)

## 萩原研究室の思いで

加藤 栄一

今から30余年前、私達鉱山学科の学生時代の萩原研究室は、戸塚町大学構内演劇博物館の前の9号館玄関上の2階にあった。ドアを開けると、蒸留水の装置があり、高い天井の部屋の中央に実験台があって、南の窓際に萩原先生の机があった。隣には化学分析実験室があり、地下には模擬坑道があって、実験室として使っていた。当時の研究室には先生のほか中村さん(現教育学部教授)と岩田さん

が助手として分析の仕事をしていた。そのほか浜横川の三沢さんがマンガン鉱物の分析をしており、先輩の阿部さんが鑄物砂の研究をしていた。卒論の学生は5~6名で、私も研究室の手伝いをしていたが、先生を中心に部屋の中はいつも活気があった。また先生は外国の女子学生の指導もしていた記憶がある。

私達の卒論の時は、研究室の学生が9名であり、卒論は4テーマに分かれていたと思う。その中の1つにさく岩による粉塵の実験があり、これに使用する岩石を1晩泊りで、茨城県の実験室まで先生におともして買いに行ったことがあった。そしてさく岩をするために、地下実験室での古いコンプレッサーの圧力計を見ながら恐る恐る運転したり、さく岩で採取した繰粉の捕集瓶が分析実験室にいっぱい並べられ、この試料の化学分析を応援したりした。このため私の卒論のテーマは別にユニメータで採った浮遊粉塵をリン酸法で遊離珪酸の分析をするものであったが、白金の採取板の加工がうまく行かず、あれこれしているうちに期日が迫り、急ぎ遊離珪酸の微量分析でまとめ卒論を通していただいた次第です。就職が決り、先生に保証人をお願いした時、会社の格別にやっかいな手続も快く引き受けていただき、何かとお世話いただいた。

或るとき研究室でダンスパーティをやるうということになった時、先生に女性をお願いしたところ、先生ご夫妻同伴で女子大生を連れてこられ、私達たじたじに対応したこと、新宿の飲み屋に時々連れていただき、先生から社会学を教えていただいたこと等、先生の学生に対するお人柄が懐かしく思い出される。

粉塵に関しての研究は当時の研究室でも行なわれていたが、現在でも鉱山作業者は全産業平均に比べて塵肺患者の割合が高く、きめ細かな粉塵防止対策が検討されている状況である。また遅れている日本の社会資本整備に欠かせない骨材の分理的開発が望まれている現在、資源業界の学識経験者としてまた指導



者として、ご活躍されている先生がおられることは大変心強い。先生が退官されても萩原研究室は資源業界の先達として不滅であってほしい。

(昭33年鉾山、秩父セメント(株)鉾山部長)

## “親分”

緑川 宏

“親分”と萩原先生のことを呼ばせて頂いている。呼び出したのは4年となり萩原研に入ってから頃かと思うが正確なことは記憶にない。ただ、自然と“先生”から“親分”になったものと思う。勿論、やくざの世界の親分子分の関係ではない。教授と学生というより、親と子の関係に近いかも知れない。師であると同時に親でもあるといった感情を私が持って、それで“親分”と呼ぶようになって現在に至っている。

私の代の萩原研は三人(網倉・堀内氏)と少なかったこともあって良くまとまっており、毎年正月三日は親分宅の新年会に家族で集まることにしている。この新年会では萩原研のOBとしては最年長となってしまったのだから月日のたつのは早いものである。

親分と旅行したことも多い。学生時代は房総半島の太海に卒論試料である頁岩<sup>ケツガン</sup>の採取に行き親分の知合いのお寺に泊った際、筆で記帳させられたことや、常磐炭鉾の切羽にもぐる時に初めてフンドシをつけたことが思い出される。日本の気候にはブリーフ型ではなくサルマタ型のパンツが適していると実感したものである。卒業後も堀内氏の道路工事現場が西伊豆の時に松崎へ釣りに行ったり、福島県的美織音にある親分の別荘に行きバーベキューをしたこともある。又、網倉氏の実家のある甲府へぶとう狩りに行った時は親分の奥様が運転免許を取って初のドライブであり、運転する奥様の緊張した顔、それを見守る親分の心配そうな顔が思い出される。

研究室では随分と酒を飲んだ。就職試験に落ちては残念会といい毎日飲んでた。卒論のテーマである頁岩を炉で焼いて膨脹させる一方、ガス台では親分推奨のシャケ缶を温め、これをつまみに飲んだ。中野先生を迎えてオデンを作って騒いだこともあった。研究室で飲んだ後に新宿に繰り出したことも度々。この時は岩崎先生が必ず一緒に、喜楽やメゾンに行った。喜楽の一見愛想の無いバアサンが懐しい。卒業の時に実験台の中からサントリーとかニッカとかの名入りのガラス器具が一杯出てきたのにはびっくりしたものである。

卒業時に我々三人の仲人は親分にしてもらおうと私が提案して勝手に決めてしまった。他の二人には迷惑をかけたかも知れないが、三人とも親分の仲人で結婚式を挙げたことは嬉しいことであった。親分はご自身の体験から結婚は早い方が良いというのが口癖だったが三人の中では私が一番遅かった。堀内氏の出産祝に集った時、親分と岩崎先生から

“お前も早く結婚しろ”

“では、探してきて下さい”

とのやりとりがあった後、すぐに岩崎先生から見合いの話が来て、生れて初めての見合相手と結婚することとなった。蛇足ながら、女房とはケンカをしたことがない。これも両先生のお蔭であろうか。

とりとめのない話を書いたが、このような話が出来たり、我々三人が今だに家族同志で付き合っているのは萩原研にいたことによると思う。研究室にいた期間はわずかだったが、親分の考え方、物の見方、心の広さなどがいつとはなしに我々三人にとって、かけがえのない栄養になったものと思っている。

年令は1年毎に増えていくが、若さ・情熱は心の持ち方で違ってくる。年寄りじみた若い人達も多くなってきているという。

親分にはいつまでも若くいてほしい。そして、素晴らしい奥様と二人でこれからの人生を楽しんで下さい。

この新しい船出に乾杯!

(昭44年資源, 日瀝化学工業株)

## 萩原研の8年間

原 田 道 昭

実に8年の長きに亘って、萩原先生のところでお世話になった。私は教育学部出身なので、昭和51年の大学院修士課程入学から58年の博士課程修了までと、その後1年間の奨励研究生の間の8年間である。長くいれればいいというものではないが、萩原研OBとしては最長年限であろう。この8年間は、私にとってまさに激動の8年間と言っても過言ではない。当時の8年間を振り返りつつ、萩原先生との思い出を綴ってみたいと思う。

〔先生との出会い〕萩原先生と出会うきっかけとなったのは、私が大学院に入学する当時、先生が骨材とセメントとの反応に関する研究に従事されていたことである。私は、教育学部にいた時に鉱物学的な分野に興味を持っていたので、この分野の基礎的な知識が、骨材とセメントとの反応に関する研究に十分生かせるであろうということと、当時この種の研究は土木分野でもほとんど手が着けられていなかったという観点から、萩原研を選んだ。これが萩原先生との出会いとなった。実に温厚で、学生の身になって考えて下さるというのが、当時の印象として残っている。

〔萩原研究室〕私がいた時の萩原研は、4年生が常に10人前後という大所帯で、野球をするには都合がいいが、研究をするにはなかなか落ち着いてできないという感があった。先生もスポーツはお好きで、研究室対抗の野球やラグビーの試合を度々観戦して下さった。大人数にもかかわらず比較的まとまりのある研究室であったのは、そんな所が大きく影響していたのではないだろうか。

また、研究室の性格上、現地調査に行くことが多く、先生も同行されて数日間学生と寝

起きを共にされることが幾度となくあった。夜遅くまで飲んで、調査の話や雑談をしている中で、萩原先生を知り、また先生は学生一人一人を知る。私が研究室にいる間に、労働省や通産省の仕事で、炭鉱や金属鉱山あるいは碎石山等の現地調査をすることが何度かあったが、このような時萩原先生は学生を連れて全部参加された。私も先生と共に全部参加し、大いに勉強させていただいた。当時、先生は60歳を越えておられ、確かに現地行動で山の上まで行くようなことは少なかったが、かなりの行動は共にされ、相当健脚であったことが想像される。この頃の思い出の数々は、当時学生であったOBの間では語り草になっている。

萩原研OBの多くは、このように卒論や先生の仕事の関係で現場回りをし、同じ萩原研の釜のめしを食って巣立って行ったに違いない。

〔南極行〕私は、昭和53年から54年にかけて第20次南極観測隊員として、南極に行った。博士課程の1年目で、研究活動も油の乗って来た時であったが、南極行の前後を含めて約1年間、それまでの研究とは別のことに従事させていただいた。この時のことは私にとって非常に貴重な経験となっており、生涯忘れることはできないであろう。当時先生に、「ひょっとしたら南極へ行けるかも知れないので……」と話をした時、心よく承諾し、また後押しして下さった。かくして、約1年間、それまでの研究を一時ストップし、南極関係の仕事に従事した。私は今、そのことを1つの財産として人生を歩んでいる。誠に先生には感謝の気持ちでいっぱいである。

そのほか、中国に行かれたこと、骨材に関する国際会議で発表するためにフランスへ行かせてもらったことなどなど、まだまだ先生に関する思い出は尽きないが、私にとって先生は、まさに我が師であり、我が親父である。いつまでもお元気で。

(51年教育, 石炭技術研究所・石炭利用技術  
部研究員)

## 房村研で過ごした日々

山本 峰子 (旧姓 保田)

私が大学4年になって、房村研にはいったのは今から6年前、それが房村研の女子学生第一号でした。周囲では意外に思う人もいたようでしたが、私は環境問題、特に大気汚染について勉強したいと思っていて、卒論では、大気中の浮遊粒子状物質の形態分析に関する研究を行いました。

房村先生は、ご存じの通り柔和なお顔立ちです。でも研究室で間近に接した先生は、時に私達学生にも大変厳しい眼差しをむけられ、じつところ、当時の私は先生の前ではかなり緊張していたものです。昨年、資源OG会なるものが開かれ、先生にも久しぶりでお会いすることができましたが、不思議と学生時代のような緊張感はすっかり消え、いろいろなお話を伺うことができました。先生のお顔が以前よりお優しくなられたように思ったのは、私だけでしょうか。

最近では、理工学部的女子学生もずいぶん多くなり、資源さえもその例外ではないようですが、当時はまだ学年でやっとひとりかふたり、かえて先生方にいろいろと気を使って頂いていたように思います。そういえば、バレンタインデーに差し上げたチョコレートのお礼とおっしゃって、房村先生がきれいな鉱石のペンダントを出張先のペルーで買ってきて下さったこともありました。今では女子学生も特別扱いでなく、現場実習にも出かけていくと聞き、大変頼もしく思っています。

現在の私は専業主婦で、子育てに日々追われており、これでよいのかと少なからず焦りを感じる毎日ですが、先日の資源OG会で房村先生は、家庭をしっかり守ることの大切さを私に話して下さい、また先生御自身、毎日

欠かさずお弁当を作ってこられた奥様のことをねぎらっておられたのが心に沁みました。そして、どんな環境でも、常に勉強する姿勢だけは忘れないように、それも受身でなくてもできるだけ自分のほうからとりくむように、とも話して下さいました。この言葉を励みにして、これから生きていきたいと思います。

先生、長い間ご苦労さまでした。そして、私達へのご指導、本当に有難うございました。

先生と奥様の、今後一層のご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。

(昭58年資源, 主婦)

## 資源工学科の動き

昭和62年度

### 1. 資源工学科日誌

4月1日(水) 入学式 新任教員:大和田秀二専任講師, 山崎淳司助手

4月3日(金) 始業式 資源工学科入学者118名(内女子8名, 早高院・石神井1名, 早高院・高圧3名, 早実推薦1名, 早稲田高校推薦2名, 一般高校推薦7名, 外国人1名)。新入生担任は山崎豊彦教授, 大学院入学式

4月18日(土) 資友会(資源工学会の学生部会)主による新入生歓迎会が、午後4時から学生食堂で開かれる。3, 4年生も参加し、盛大な会となる。

4月24日(金) 午後6時半より校友会館にて資源工学会総会を開催、参加者は70名であった。

5月7, 8日(木, 金) 第24回理工スポーツ大会が河口湖畔で開かれる。資源工学科からも数チーム参加する。

5月30, 31日(土, 日) 一年生のオリエンテーションを追分セミナーハウスにて実施。

6月11日(木) 63年度修士課程推薦入学者決定(資源15名, 教育5名, 計20名)

6月18日(木) 大和田秀二講師, 山崎淳司 助手の歓迎会を「ぼたん」で開く。

7月3日(金) 午後6時半より「大隈完之 荘」にて早資紅会を開催。出席者18名(内 大学7人, 丸紅11名)

9月15日(火) 大学院前期課程入学試験(筆 記)

9月24日(木) 63年度修士課程入試合格者 決定12名(資源5名, 教育7名)

9月24日(木) 野口康二助教授 存外研究 員としてアメリカへ出発。

10月24日(土) 63年度一般高校推薦入学者 面接10名(内, 女子1名)の応募者全員合 格。

10月29日~11月4日(水) 早稲田祭, 同時 に第34回理工展。資源工学科のテーマは「資 源リサイクル」3年生を中心に展示物を製 作。大変盛況でした。

10月31日(土) 資源女子会が理工学部ゼミ 室(51号館・12F)で開かれる。資源工学 科始まって以来の画期的な出来事です。O G(?), 先生と懐かしい話しに花が咲き和 気あいの内に来年の幹事を決めて散会 する。

12月17日(木) 3年生実習報告会, 実習報 告者37名(内, 女子6名)

12月21日(月) 資源工学教室と教育学部地 学教室との恒例の忘年会が資源工学教室の 主催で「ひよこ」(高田馬場)で開かれる。

1月9日(土) 午後5時より, 校友会館に て資源工学科新年会, 参加者は学内 名, 非常勤 名。

1月20日(木) 午後4時50分より房村信雄 教授「教師生活を振り返って」と題しての 最終講義, 資源工学科の学生, OB等多数 聴講。女子学生等による花束の贈呈。

1月22日(金) 午後4時50分より萩原義一 教授「在職39年を顧みて」と題しての最終 講義, 資源工学科の学生, OB等多数聴講。 女子学生等による花束の贈呈。

2月12, 13日(金, 土) 学部卒論審査会

2月15日(月) 大学院修論審査会

2月19日(金) 理工学部入試, 例年の2月 27日より8日間早い入試。志願者数は 名。資源工学科も定員60名に対して約10倍 であった。

3月10日(木) 教授会で中山智晴助手の新 任(4月1日付)が承認される。

3月22日(火) 午後6時より, 三井クラブ にて資源工学科教職員による萩原義一, 房 村信雄両教授の長年の労をねぎらう退職記 念会を両教授夫人の同席のもとで行った。 参加者17名。楽しい歓談の一時を過ぎた。

3月25日(金) 卒業式, 学位授与式, 資源 の学部卒業生 名(内女子4名), 大学院修 士課程修了者 名, 午後6時より市が谷「私 学会館」にて卒業生主催による謝恩会。

## 2. 就職状況

### 学 部

(1) 鉱山業 1名  
動力炉核燃料開発事業団

(2) 石油関係 5名  
昭和シェル石油, 西武ガス, 九州石油, 帝国石油, 石油資源開発

(3) 化学工学・セラミックス 5名  
ライオン, 東芝セラミックス, INAX 信越化学, 吉野石膏

(4) 機械・エンジニアリング 4名  
東洋エンジニアリング, 住友重機械工業, 新キャタピラ三菱, 新東工業

(5) 電気 4名  
富士電気, 日本電気, 松下電器産業, 東芝

(6) 商社 2名  
極東貿易, 菱電商事

(7) 銀行・証券 13名  
三菱銀行(2名), 三和銀行, 三井銀行, 日 本興業銀行, グレディスイス銀行, 東京都 労働金庫, 住友生命, 三井生命, 日興証券, 山一証券, 野村証券, 明光証券

(8)建設関係 2名

間組, ドリコ

(9)情報, ソフトウェア他 3名

リクルート, 日本DEC, エックス都市研究所

(10)その他 3名

日本航空他。

(11)大学院進学 25名

早稲田資源21名, 東工大2名, 九大1名

### 大学院 (修士課程)

昭和電工, 出光興産, 古河電工, INAX, 住友金属工業, シチズン時計, 石油公団, 住友セメント, 横河ヒューレットパッカード, 三菱化成, 小松製作所, 東レ

※各科共通も含めると求人数は約450社。

### 3. 博士学位取得者

(1)課程によるもの (工学博士)

62年10月

山崎淳司 論文題目:天然産ゼオライトの陽イオン置換体の結晶化学的研究  
~特に繊維状ゼオライトについて~  
(主査 大塚良平教授)

62年12月

朴 鉄洙 論文題目:日本列島ならびに韓半島に産する石炭の岩石学的・古植物学的研究 (英文)  
(主査 山崎純夫教授)

### 4. 専任教員海外出張

房村信雄教授

4月21日~29日, 韓国, 石炭開発と保安国際シンポジウムに論文提出並びに技術見学旅行に参加。

今井直哉教授

7月10日~20日, 韓国, 永豊鉱業第2蓮花鉱山の坑内地質調査  
大和田秀二講師

8月1日~9月10日, タイ王国, 未利用希少金属資源の有効活用に関する研究協力

野口康二助教授

9月24日~4月20日 (1988年) 存外研究員としてアメリカへ

房村信雄教授

9月26日~10月3日, オーストラリア, 第22回国際労働衛生学会及び組織委員会に出席。

11月27日~12月6日, 中華民国, 中国鉱冶工程学会で講演及び炭塵爆発防止検討会に出席。

山崎豊彦教授

3月7日~16日 アメリカ, 米国化学工学会主催, EORシンポジウム研究発表講演および研究交流のため

### 5. 63年度資源工学科専任教職員

63年度の教職員は次のとおりです。

教授	今井 直哉	資源科学研究室
〃	岩崎 孝	開発・環境工学研究室
〃	大塚 良平	資源科学研究室
〃	名古屋俊士	安全工学研究室
〃	橋本 文作	応用力学研究室
〃	原田 種臣	原料工学研究室
〃	山崎 純夫	地質学研究室
〃	山崎 豊彦	石油工学研究室
助教授	野口 康二	探査工学研究室
講師	大和田秀二	原料工学研究室
助手	内田 悦生	資源科学研究室
〃	山崎 淳司	資源科学研究室
〃	中山 知晴	開発・環境工学研究室
職員	米持 賢治	資源工学実験室
〃	高山真理子	資源工学事務室
学職	方波見 孝	資源工学実験室

なお, 63年度の学科主任および学級担任は次のとおりです。

学科主任	今井 直哉	教授
1年担任	名古屋俊士	教授

2年担任 山崎 豊彦 教授  
3年担任 山崎 純夫 教授  
4年担任 野口 康二 助教授

### 今年、理工学部は80歳

1908年(明治41年)、早稲田大学に理工科が設置されて丁度今年が80年。そして機械科、電気科に次いで資源工学科の前身である採鉱科が設置されたのが1910年(明治43年)である。

その頃、現在の、いわゆる私立“老舗”大学の大部分がそれぞれ設立されたのは周知の通りだが、理工科があったのは早稲田だけ、まして資源(採鉱)科は未だ他の私大にないことはいうまでもない。

何故金の掛る理工科を設立したかという、森羅万象をきわめるには、舎密(化学)と窮理(物理)が必要という老公の信念から、ま

た採鉱科の設置は、工業立国には地下資源の開発こそ急務であるとする卓越した見識によるものである。

80年の間に早稲田の理工の、そして資源の栄光はもちろん大いに上りこの事自身についてはご同慶の至りである。しかしこの世はハイテク時代、技術も知識も留まることを知らない。そしてその対応はといえば、研究教育体制の改革、設備の拡充と更新、奨学基金の設立などが当然のことながらとられなければならない。

社会との新連繫システムとして、寄付講座やプロジェクト研究の拡大、大学院新棟の建設計画等々が、記念行事として今後逐次発表されていくこととなろう。

またまた卒業生、および父兄各位のお力をお借りしなければならなくなりそうであるが、ご理解いただければ幸いである。(I)

次の方々が亡くなりました：加藤克行(昭和58卒, 62.5.18), 田中理(昭62卒, 62.10.12)。つつしんで哀悼の意を表します。

#### 編集後記

■第23号は、萩原義一、房村信雄両教授の退職記念号となりました。両研究室の卒業生のかたがたに原稿をお願いしたところ、快くお引き受けいただき、思い出深い紙面を作ることができ、感謝しております。本来なら、もっと多くの卒業生の皆様方に思い出を書いて頂きたいのですが、紙面の制約でそれができず残念です。■理工学部は、国立大学の入試改革の影響を受け、受験生が昨年より約2000人少なくなりました。資源工学科では、その影響を逆に受け、何と定員60名の約2倍の118名の新入生を迎えることになりました。資源工学科の明日を荷う学生が多く入ってくれることは喜ばしいことですが、2年時以降の実験、実習、卒論等を考えると、この余波は教室内に当分尾を引きそうです。■入試同様、資源工学科初まって以来の出来事の1つとなる資源女子会が発足し、その第1回資源女子会が11月31日に開催されました。資源女子会は43名(内、存学年38名、卒業生15名)です。最近特に女子学生の資源工学科への入学が多く、現在、3年生で学生数63名中6名、2年生で学生数73名中10名、1年生で学生117名中8名です。こうしたことから、資源女子のための就職先を従来にもまして直剣に考える時期が来た様に思います。(名古屋 俊士記)

〒160 東京都新宿区大久保 3-4-1

早稲田資源工学会 早稲田大学理工学部資源工学科内 電話03-209-321内線2137

振替番号 東京1-143534

協和銀行早稲田支店 普通141-322760